

地 近 り に 対 す る 一、二 の 考 察 (その 一)

松江工業高等専門学校	正会員	鈴木鹿和央
〃	〃	藤原東雄
〃	〃	持田正悦

ま え か き

地這りが最近又問題となり話題となる機会も多くなった。しかし、従来地這りと呼ぶものの多くは山崩れ等を混合したものが主体となっているように思われる。これは明らかに地這りを扱う人々の考え方が工学系、理学系において異なっていたためと考えられる。そこで筆者等は地這りについて再考する余地があるものと考えて、多くの現地調査を行ってみた。その結果を報告しておきたい。この報告に当ってはまず地這りの型を出来得る限りにおいて区分すること、及びそれらの有する特徴を考察してみたい。

1. 地亡の調査結果

筆者等は前記の主旨のもとに次の地域の地にりを調査したが、これらと形成する地質は主に第3紀中新世の地層により構成されるものが殆んどであった。

a. 東村地区

図示されているように当調査地域を構成する地質は古第3紀層、新第3紀中新世層及び沖積世層からなる。地図りには、(a)に示されているように沖積層、及び新第3紀中新世の地層玄武岩質集塊岩の中に生じている。この発生仕方でも現在では多くは沖積層を構成する礫、砂、シルトロームの中における地図りが多い(ロ図)が、これは基盤岩の斜面に沿ってずり落ちるものであり、一般に高傾斜を成すものが多い。それに対して(ハ)図に示されているようにかなり緩傾斜地においては沖積層が広がるに伴い、基岩の風化部がそれにひきずられてまわっていくような形跡が見られる。

b. 後根波地区

本地区は地氈りとしてはかなり小規模であるが、この地域を構成するのは第3紀中新世の地層である砂岩、頁岩、玄武岩、安山岩、石英安山岩であるが、地氈りは図に示されるように玄武岩が砂岩を Cap Rock としておおう所にみられる。これは次のように考えられる。砂岩は玄武岩の貫入により風化変質を受け、更にこの変質部分にレツカ水という状態で浸潤した地下水が流れ込み、これにより砂岩は一種の流砂現象を生じたものである。又附近に存する断層も相当に地氈りと関係と有するものと考えられる。

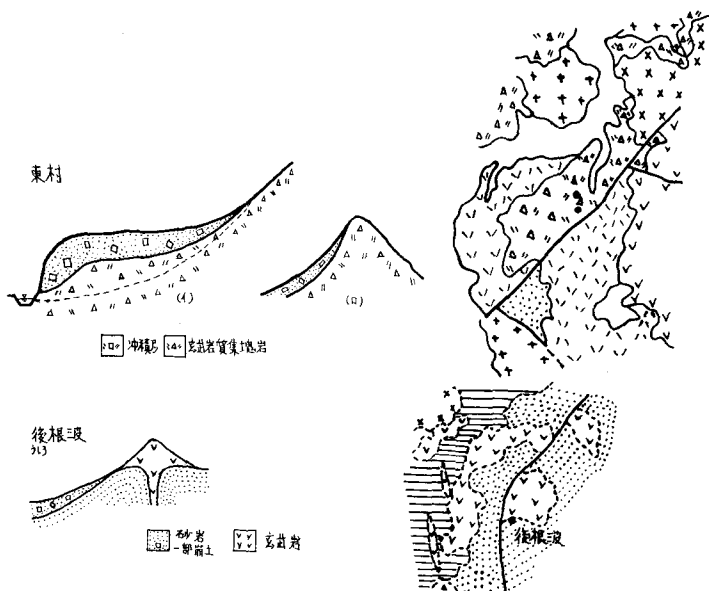
C. 小伊津地区

この地区は第3紀中新世の黒色頁岩で構成されているが、地成りは大体(1)、(2)に示される形式で発生している。即ち、(1)に示されるように頁岩の風化が浅い場合には地成りは頁岩の上面と地下水面として上にある砂、レキ等の沖積層になるが、頁岩の風化が深い場合にはこの頁岩自体が不透水層と

としての役割を果たし得ず一部マサツによると考えられる粘土化を生じて迂り落ちていく。この場合には当地域とは相当大規模な地迂りを生じている。

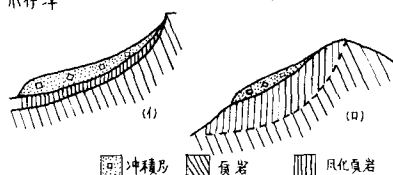
d. 皆市地区

この地域は第3紀中新世の地層と考えられる頁岩、流紋岩、洪積層、沖積層から構成されるが、地迂りは図(4)、(5)に示されるように頁岩が流紋岩に貫かれる部分における沖積層が迂っている。しかしこの場合沖積層の下部に洪積層が存在するのが常であることは注目すべきである。



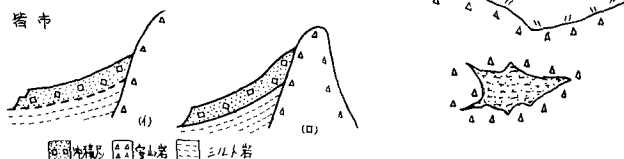
e. 伊後-西村地区

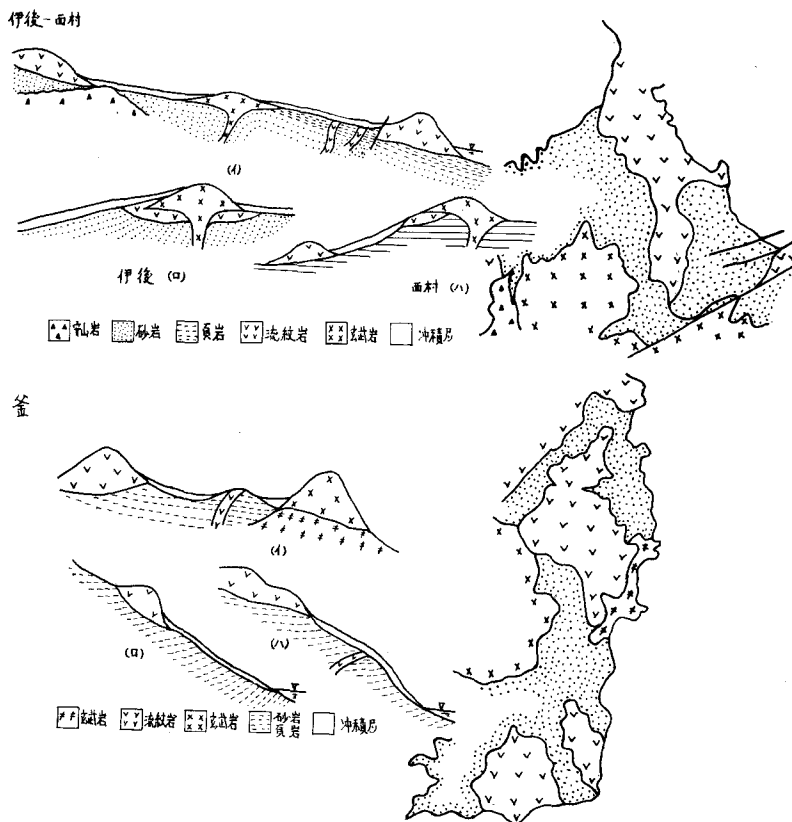
この地域の地質は図に示されるとおりであり、一般に伊後地区と西村地区に分けられる。伊後地区のものは現在(4)図に示されるように中新世の地層である砂岩とその上にのる沖積層が迂りおちているが、この地迂りではこの砂岩をおおう流紋岩が水と供給するに大



f. 釜地区

この地域は図(4)、(5)、(6)に示されるとおりであるが、紙面の都合上当日発表したい。





結 論

防災対策の上において地氾りのタイプを決定することは有意義と考えるが調査地域における地氾りより次のタイプが考えられる。

1. 明らかな沖積層の氾り 東村地区, 皆市地区
2. 洪積層の氾りに伴う沖積層の氾り 皆市地区, 伊後地区, 釜地区
3. 沖積層の氾りに伴う第3紀層の氾り ... 釜地区, 東村地区, 伊後-西村地区
小伊津地区
4. 火山岩による第3紀層の氾り 後根波地区, 釜地区
5. 第3紀層の地氾り 小伊津地区